

芥沢銑介の

文部省選定
教育映画祭
優秀作品賞



鯛泳ぐ文 着物



如の字 額

●企画

(財) ポーラ伝統文化
振興財団

●製作

(株) 桜映画社

16% カラー35分
定価=210,000円
VTR
定価=55,000円

美の世界

映画

『芥沢銑介の美の世界』の

完成によせて

日本民芸館館長 柳 宗理

最も日本的で、しかも世界にその名が響く染色家芥沢銑介氏のこの映画は、ちょうど芥沢先生が亡くなる数カ月前の談話や、気迫のこもった先生の表情を頂点として、所々に芥沢銑介の作品の紹介を挟んで、迫力ある真実味のある構成となっている。

静岡市の呉服商に生まれ、高等工業の図案科を出て、やがて柳宗悦と知り合い、本格的な工芸の道へ入り、又沖繩の紅型の美に触発されて、型染めの芥沢芸術を完成していく経過等、その取り上げ方は見事である。又清貧に甘んじながらも、仕事一途に生き抜いた芥沢銑介の生涯がとてもよく描かれていて、気持のよい見ごたえのある映画となっている。

いずれにせよ芥沢芸術の秘められた内奥を知る上に、この上ない見事な映画であるとと言えるであろう。この映画の完成に衷心よりお祝いを述べる次第である。

●解説

芥沢銑介は、型絵染めの人間国宝、文化功労者で、独自の染色作家として知られている。現代の染色作家の第一人者であった。

彼は、大正デモクラシーと呼ばれる時代に青春を過ごし、芸術を志し、ようやく作家の道に入ったと思ったら戦中・戦争直後の長い冬の時代になり、戦後目覚ましい活躍をした作家の一人である。映画は、その長い生涯をその人と作品によって描いている。

芥沢には、型染めによる絵巻のすぐれた作品がいくつかあるが、これは映画による芥沢銑介自身の絵巻である。

彼が生涯師と仰いだ柳宗悦（日本民芸運動の創始者）、先輩の富本憲吉（陶芸家）、浜田庄司（同）、河井寛次郎（同）、同輩の棟方志功（版画）らの同時代の最後の人となった芥沢銑介の、生きた貴重なモニュメント（記念碑）として、この映画は企画された。

益子風物図



● 芹沢銈介年譜

明治二八年（一八九五）

静岡市の呉服商、大石角次郎の二男に生まれる。

大正三年（一九一四）

19歳 東京高等工業図案科に入學。

中学上級の頃より『白樺』を耽読。

大正六年（一九一七）

22歳 静岡市の芹沢たよと結婚、芹沢姓となる。

大正一四年（一九二五）

30歳 朝鮮京城に民族美術館および慶州仏国寺を訪れる。船中に柳宗悦の論文にいたく感動、生涯の転機となる。

昭和三年（一九二八）

33歳 初めて沖縄の紅型を見、深くひかれる。

昭和四年（一九二九）

34歳 国画会に『杓子菜文藍地壁掛』を初出品してN氏賞を受ける。

昭和七年（一九三二）

37歳 『いそは物語絵巻』を完成。

昭和九年（一九三四）

39歳 東京、蒲田に移る。

昭和一四年（一九三九）

44歳 師柳他民芸同人と沖縄に渡る。

昭和一六年（一九四一）

46歳 『法然上人絵伝』を完成。

昭和二〇年（一九四五）

50歳 戦災に会う。

昭和三〇年（一九五五）

60歳 蒲田の工房、再建なる。

昭和三一年（一九五六）

61歳 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。

昭和三二年（一九五七）

62歳 鎌倉在の農家に独居。創作に打ち込む。

昭和五一年（一九七六）

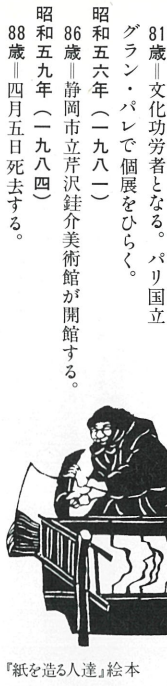
81歳 文化功労者となる。パリ国立グラン・パレで個展をひらく。

昭和五六年（一九八一）

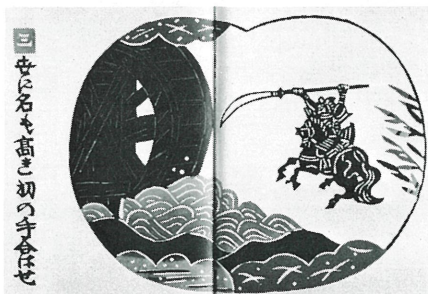
86歳 静岡市立芹沢銈介美術館が開館する。

昭和五九年（一九八四）

88歳 四月五日死去する。



『紙を造る人達』絵本



絵本どんきほうて

をよく現している。

昭和20年4月に、芹沢は50歳で空襲にあい工房、家財すべてを失った。しかし荒涼たる中でかえって美しいものへの思念が燃え、その年の秋には早くも型染めカレンダーの制作をはじめた。

戦後の食料難からもようやく抜け出した昭和25年から30年頃になると、誰の仕事もそうだったが長い冬の時代をへて一斉に花ひらいた。芹沢も蒲田の焼跡に仕事場が完成し活気があって、つぎつぎ充実した作品を生む。

芹沢の仕事もようやく爽やかな外気をあびて、広い世間へ出た。それを象徴するのが彼の数多い暖簾だ。着物、屏風、絵本、装幀……一見して芹沢と分る独特な彼の作品はしかし多岐に亘る。60歳から70歳にかけて、挿画でも彼は独自の仕事をした。

また、これらの作品を生んだ62歳から約10年間、彼は鎌倉在の農家に独居している。「所帯じみた暮らしから離れて気持を純粹にして仕事をしたいと思ったんです。あそこは周辺の自然が豊かでデザインのモチーフが沢山ありました」と語っている。

静岡市の登呂公園には市立芹沢銈介美術館がある。ここでは彼の夥しい民芸品の蒐集も、創作同様の待遇を与えられている。

芹沢は、まだ家に残した蒐集品を美術館に送り出す支度をしていた。アフリカの民芸品のネックレスは、彼の88歳の誕生日を祝ってくれる工房の人たちに分けてあげようと思う。

しかし、彼はそのパーティーの騒々しさからののがれて、独り居間の椅子にかけた。彼はこの家も工房も捨てて自由な旅に出たいという。蓑を背負ってズツ袋を下げて。そしてもう一度勉強し直したいと。

しかし意欲はあるが、足がもういうことを聞いてくれない。仕方がないから今日は板画を描く。描いていると、昔親しんだ紺屋の親方や職人、一緒に働いた人たちの顔がつつぎ浮かんでくる……。題して、『染人来る』。

● — あらすじ —

東京蒲田の芹沢の住居を訪れた人は、居間兼客間がまるで世界の民芸品の展示場でもあるのにまずおどろかされた。彼はそういう中で、いつも仕事をしていた。同じ屋敷内に、染場や干場もあった。彼の模様の下絵は、過去の夥しい素描の中から生れている。

彼は年老いていたが、下絵が型紙に彫られ、色差しされて美しい染色模様が生まれ出る工程をのぞいてみる事が出来た。

芹沢銈介は、明治28年静岡市の大きな呉服屋に生まれ、少年時代は画家志望だったが、やがて染色作家の道を歩む。それは日本の民芸運動の提唱者柳宗悦と、沖縄の紅型との出会いによる。

初期の作品を訪ねてみた。それは今も生き生きとしている。型染めは、近代芸術の自由な表現からみれば、制約の多い道だが、彼はこの仕事に生涯をかけた。静岡時代の最後を飾る『いそは物語絵巻』は、国際的にも注目されて、彼は大きな希望を懷いて上京する。昭和9年、39歳のとき東京の蒲田に移る。しかし、昭和の不況時代で、生活は苦しくなり身辺の物がつぎつぎ消えていった。そんなとき幸い和紙に出会った。よい手漉和紙は布同様に染色できる。この和紙のおかげで『絵本どんきほうて』が生まれた。

昭和14年に、柳宗悦に率いられて初めて沖縄に渡った。紅型に出会ってから10年の歳月がたっていた。芹沢は新しい道を行く思いで夢中だった。

戦争が長びき生活の窮乏つるの中で、昭和16年大作『法然上人絵伝』を完成した。この時代の『益子日帰り』は、彼の肉筆のうまさ

● — スタッフ —

製作＝村山和雄
六鹿英雄
監修＝北村哲郎
脚本＝村山英治
演出＝村山英治
撮影＝村山和雄
金山富男
作曲＝山内 忠
編集＝沼崎梅子
解説＝宇野重吉
照明＝浅見良二
森 準蔵
本橋俊男
録音＝伊藤 亨

監修＝北村哲郎

協力＝静岡市立
芹沢銈介美術館
芹沢染紙研究所
日本民芸館
大原美術館
中央公論社
株式会社ざくろ
外村吉之介
小川龍彦
金子量重
四本貴資
資料提供＝
日本近代文学館
テレビ朝日
毎日新聞社
石川光陽

縄のれん文 のれん

